『一人一人の心がけ』

多久市立東原庠舎西渓校　6年　梶原　宏聖

「痛た」「痛い」この言葉はぼくの母がギックリ腰になった時によく言っていた言葉です。ギックリ腰になった時、母はとても痛そうな表情をしていました。ぼくはこんな母の顔を初めて見ました。その時父が来て、母が、少しでも楽になるように悪戦苦闘しながら助けていました。父のサポートのおかげもあり母は少しずつ元気になっていきました。ぼくはそんな父と母の姿を見て母がよく言ってる言葉が頭にうかびました。

「困っている人がいたら助けてあげてね」この言葉を意識したのか分かりませんが実行出来た事が二つあります。

一つ目は祖母の事です。佐賀市内に住んでいるぼくの祖母は、美容師をやっています。立ち仕事なのでとてもきついと思います。仕事でそうなったのかは分かりませんが、祖母は腰が少し曲がっています。立っているのは大丈夫だけど歩くのがきつそうです。だから祖母と一緒に歩くときには、ぼくのかたを貸しています。そしたら祖母はすごく喜んでくれます。一緒に住んでいる多久の祖父も数年前に腰の手術をしました。手術をしてからはふつうに過ごしていますが、草かり機を使った作業などをしたあとは今でも痛そうにしています。今までとても元気だった母が急に腰が痛くなって今までふつうに出来ていたことが、色々出来なくなったりするのを近くで見て、改めて祖母や祖父、お年寄りの大変さに気付くことができました。祖父の代わりに草かり機を使うことはまだぼくには危ないと思うのでそこまで出来ないけど、時間がある時には草むしりをしたり、祖父にマッサージをしてあげたり、自分に出来る事を考えて、行動にうつしていきたいと思います。

そしてもう一つが電車での出来事です。ぼくは週に三回サッカーの練習に行くためにふつう電車に乗っています。六年生はぼく一人で、ぼくは電車リーダーとして数人の下級生達と一緒に乗っています。電車の席はだいたいいつも空いていないので、みんなで一緒に立って乗っています。でもこの前、席が空いている時がありました。ぼく達は一緒にその席にすわりました。すると後から三人のお年寄りの方達が電車に乗ってきました。その時席は空いていなかったのでお年寄りの方達は困っているようでした。ぼくはその時「席をゆずろう」と思って、みんなに声をかけようと思いました。するとその中の一人の子が僕が言おうとしていた言葉「席をゆずろう」と言ったのです。他の子達も「うん」とうなずき、ぼく達はみんなでお年寄りの方三人に席をゆずりました。その方達は「ありがとうね」と笑顔でこたえて下さいました。席をゆずって喜んでもらえた事はもちろんうれしかったです。でもそれよりうれしく思えたことがありました。それは下級生のみんなが「自分さえよければ」という気持ちではなく、困っている人を自分のことよりも優先させて行動している姿を見れた事です。これから先、ぼくも下級生も電車だけに限らず、困っている人がいたら手を指しのべる事が出来る人間になりたいです。

「困っている人がいたら助けてあげてね」母からのこの言葉をしっかりと心にとめて、相手の気持ちに寄りそえる人になりたいです。